

看護学生による保育所の子どもたちへの健康教育の試み

上原和代¹⁾、鈴木ミナ子²⁾、仲間富佐江³⁾、国吉ひろみ⁴⁾

【背景】本学の小児保健看護の実習施設である保育所から健康教育に関する要望があり、平成23年度に看護学生による子どもたちへの健康教育を試みた。

【目的】子どもへの健康教育をすることは、学生にとってどのような経験であったかを記述し、今後の小児保健看護の教育内容と方法に示唆を得ること。研究デザインは、自記式質問紙とグループインタビューによる記述的研究である。対象は、小児保健看護実習Ⅰで子どもたちへ健康教育を実施した学生。

【結果】これまでに健康教育の経験があった者は20名中1名、健康教育の実施について全員が楽しかったとあったが、半数は負担があったと回答している。学生の経験は、健康教育前日までは「やりくりしながらの準備」「クラスの子どもに合わせた健康教育の仕上げ」、当日には「不安と責任感の中での健康教育の開始」「子どもの反応に合わせる工夫」「子どもを集中させる工夫」、事後には「子どもと保育士から得られた健康教育の効果」であった。学生は保健をテーマにした健康教育をこの時期に行うことに肯定的であった。また健康教育をとおして効果的な子どもとの関わりを学び、学生自身の生活習慣の見直しをしていた。

【結論】2年次生にとって健康教育の実施は負担があるものの、子ども理解や看護専門職としての意識が深まる経験であった。また教員は健康教育そのものへの援助に加え、科目を超えた学習のつながりを検討する必要がある。

キーワード：健康教育、保育所、就学前の子ども、看護学生

Ⅰ. はじめに

本学看護学部の学生たちは2年次後期に開講される小児保健看護実習Ⅰ（以下、実習Ⅰ）において、健康な子どもの成長発達の特徴とそのアセスメント方法や支援方法、また日常ありふれた健康問題をもった子どもへの支援方法について主に保育所での実習をとおして学んでいる。平成22年に実習施設である保育所のうち1施設から、子どもたち向けの健康教育をして欲しいとの要望があり、学生主体で手洗いをテーマにした健康教育を実習中に行った。翌年には同様の要望がいくつかの施設からあがった。新型インフルエンザの流行等から保育所では子どもたちの健康を守る取り組みが急務となっており（多田ら, 2006；出雲ら, 2007）、本学の立地する地域においても同様の状況であった。保育と保健、看護の距離が縮まる昨今、看護大学の学生

の実習に期待が寄せられていると感じ、学生と実習施設およびその利用者のそれぞれに利益があるように教育内容を改善したいと考えた。

看護を専攻する学生の保育所での実習に関する先行研究は、通常保育活動の中で学生が感じとった子ども観に関するものが多く（矢田ら, 2007；白水ら, 2008）、子どもへの健康教育については看護専門職が行ったもの（松谷ら, 2007；大久保ら, 2008；佐藤ら, 2011）が数件報告されているのみで、学生が主体となった健康教育の取り組みの報告はなかった。

今回、本学看護学部2年次生で展開される実習Ⅰにおいて保育所に入所する子どもたちを対象にした健康教育を施設の要望に沿って試験的に実施した。子どもへの健康教育をすることは学生にとってどのような経験であったかを記述、検討し、今後の小児保健看護の教育内容と方法に示唆を得たい。

Ⅱ 方法

1. 調査参加者と健康教育の概要

-
- 1) 沖縄県立看護大学 看護学部 小児保健看護
 - 2) 元沖縄県立看護大学 看護学部 小児保健看護
 - 3) 沖縄県立看護大学 看護学部 教育補助嘱託員
 - 4) 沖縄県立看護大学 看護学部 教育補助嘱託員

本調査の参加者は平成23年度に実習Ⅰを履修した2年次生のうち子どもたちへの健康教育を実施した学生である。健康教育を希望した保育所は4施設あり、実施した学生は4グループ計20名で、全履修学生の1/4であった。健康教育を受けたのはどの保育所も4～5歳クラスの就学前の子どもたちであり健康教育のテーマは手洗い、食事と排泄、歯みがきの3種類であった。

学生の事前準備は実習Ⅰの3週間程度前から開始され適宜、実習指導教員から助言を受けた。各健康教育は20~30分程度の内容で、教育媒体のグリッターバグ、食育エプロンと付属の絵本、歯模型は大学の所有する市販の教材を提供した。教員は各教材の一般的な使用

方法を学生へ予め伝え、学生はペーパーサート、紙芝居、替え歌などで自由にアレンジした。なお、グリッターバグ(株式会社ニチオン)とは、専用のローションを手塗りに塗り、通常の手洗いをした後、専用のライトで照らすと洗い残しの部位が確認できる手洗いトレーニングボックスで、学生は1年次の看護方法Ⅰで演習した経験があった。実習Ⅰが展開されたのは2011年10月~11月で、健康教育はすべて実習期間中に実施された(表1)

表1 学生グループと健康教育の概要

| グループ | A | B | C | D |
|-----------|-----------------|--------------------|---------------------|-----------------------|
| 子どもの年齢(歳) | 5 | 5 | 4~5 | 4~5 |
| 人数(人) | 23 | 8 | 35 | 27 |
| テーマ | 手洗い | 消化と排泄 | 手洗い | 歯みがき |
| 教育媒体 | 紙芝居 グリッターバグ* | 食育エプロン* 絵本*、クイズ | ペーパーサート グリッターバグ* | ペーパーサート 歯模型ブラッシング* |

注) *市販の教材

2. 方法

1) アンケート調査

アンケート調査は無記名自記式とし各グループの実習の全日程終了後に学内の教室で行った。調査項目は、学生の健康教育の経験、今回の健康教育の準備、実施状況、実施後の感想を含め、5分程度で回答できるものである。実施後の感想は、企画および実施の楽しさ、負担感、実習内容としての適切性について、‘とてもそう思う’から‘全くそう思わない’までの4段階のリッカート尺度を用いてたずねた。結果は単純集計した。

2) グループインタビューによる調査

グループインタビューは参加希望のあった学生へアンケート調査後そのまま教室に残ってもらい、実習グループ毎に一回行った。所要時間は30分でインタビューガイドには、健康教育をふりかえって大変だったこと、よかったこと、教育的な支援に関する要望を含めた。インタビューは実習指導教員以外の教育補助嘱託員あるいは教員とし、事前に安梅(2007)のグルー

プインタビューにおけるインタビュアーの役割を読み合わせ、環境づくりやグループダイナミクスの促進について学習会をした。グループインタビューの内容は学生の許可を得て録音した。実習グループ毎に音声データから逐語録を作成した後、丁寧に読み返し、語りの内容の類似性によって分類し、サブカテゴリーとして名前をつけた。次にグループ間でサブカテゴリーの内容の相違を比較・検討し、これらの名前をつけ直し、類似するサブカテゴリーを集めてカテゴリーを作り名前をつけた。なお結果の妥当性が高まるようインタビューの分析は2名の教員で相互に確認しながらすすめた。

3. 倫理的配慮

健康教育の希望があった保育所で実習を予定している学生へ、保育所側が希望する健康教育の内容を教員から説明し実施は学生の自由意思であることを伝えた。保育所側へは健康教育の実施は学生の希望によること

を予め伝えた。また双方へ、健康教育は実習 I の付加的内容のため、成績には反映しないことを伝えた。健康教育後の調査への協力は、アンケート調査、グループインタビューのそれぞれについて、調査目的、方法、

III 結果

1. アンケート調査

実習後のアンケート調査は調査参加者 20 名全員から回答が得られた。これまで健康教育の学習経験があった学生は 20 名中 9 名 (45%)、企画・実施の経験があった学生は 20 名中 1 名 (5%) でほとんどの学生が初めて健康教育を実施した。事前準備にかかった時間は学生一人当たり最小 2 時間、最大 9 時間、平均 5 時間 21 分であった。健康教育の企画・実施について、負担感があったとした学生は半数であったが、企画・実施が楽しかったか、との問いに全員が「とてもそう思う」「まあそう思う」と答えている。また、実習内容として適切かとの問いに全員が「とてもそう思う」「まあそう思う」と答え、実習内容として適切かとの問いには全員が「とてもそう思う」「まあそう思う」と答えた。

2. グループインタビューによる調査

グループインタビューは調査参加者 20 名中 18 名 (90%) の参加が得られた。実習 I の全日程が終了した後であったためか、どのグループも学生たちは和らいた表情で健康教育の経験について子どもたちとのやりとりや学生自身の気持ちを具体的に語っている。以下に 1) 健康教育をとおして得た学び、2) 学生の気づいた学生自身の課題とその後の変化、3) 教員の教育的支援に関する学生の要望、に分けて示す。

1) 健康教育をとおして得た学生の学び

健康教育をとおして得た学生の学びについて、学生の語りを「」、サブカテゴリー名を〈〉、カテゴリー名を【】で表示し、健康教育前日まで、当日、健康教育後に分けて説明する (表 2)

(1) 健康教育前日まで

大変だったこととして学生が話した内容の多くは事前準備についてで、全てのグループで話題になった。学生は教員からの申し入れの後、グループで相談し「やる」と返答したものの「正直めんどい」「負担が大きくなる」など〈事前準備の大変さ〉について一人の学生

所要時間、学術的な場での公表と個人情報の保護、自由意志による参加を書面と口頭で説明し、同意が得られた者を調査参加者とした。

が語ると、ほとんどの学生が大きくうなずいた。また「例がなくして」「どこまで教えればいい?」と〈イメージがつかないことでの事前準備の遅れ〉があった。事前準備にかかった時間は、夏休み中にゆとりをもって準備したグループもあれば、全員集まったのは一日だけと〈最小限の準備〉をしたグループもあり、差が大きかった。複数の実習科目が連続して展開されるため時間的に厳しい状況であったが学生たちは、「ちょっとだけ楽しくなったりして」と〈事前準備の楽しさ〉を見つけたり、「うまく分担」し、「みんなバイトを言い訳にさぼったりしなかった」と〈事前準備をとおしてメンバーシップの確かめ〉をしていた。学生は時間、人手、役割分担、得意な作業、面倒な気持ちをグループで【やりくりしながら (の) 事前準備】をすすめていた。

実習 I が開始し健康教育当日までの数日の経験から学生は、「3 歳はほぼ聞いてない、4 歳はほぼ聞いてる、5 歳は聞いている」と年齢ごとの集中力の差を表現したり、子どものテンションに合わせて健康教育は「面白く、ていうか本気でやる」必要があると話し、毎日のカンファレンスを利用して対象クラスの情報共有をし、〈子どもたちの認知発達段階の査定〉をしていた。またあるグループでは事前に対象クラスの保育士を交えてリハーサルをし、ペープサートのコツやいつも流れている歯みがき歌を利用するなど〈保育士からスキルを学ぶ〉ことで、【クラスの子どもに合わせた健康教育の仕上げ】をしていた。

(2) 健康教育当日

健康教育の当日、学生は「返事が返ってくるか?」「手探り」と〈子どもの反応への不安〉を感じつつ、「うまくできるか」「重圧...なんか責任」「子どもに伝えきれるのかな。」と〈健康教育の提供者としての責任〉も感じていた。【不安と責任感の中での健康教育の開始】の様子は 3 つのグループから語られた。

表2 健康教育をとおして得た学生の学び

| グループ | 語り | サブカテゴリー | カテゴリー |
|-----------------|---|-----------------------|----------------------|
| 健康教育前日まで | | | |
| A | 正直、めんどいなとは思った | | |
| D | 連続実習の一番最後に小児があって、(実習の)合間に準備をやらなきゃいけないっていう...時間の確保がなかった。 | 事前準備の大変さ | |
| B | 実習終わってからけっこう夜に帰るっていうそういうのが結構きつかったかな。 | | |
| B | 周りで(健康教育を)やってる人を聞いたことなくて。例とかがなくて。 | | |
| D | どこまで教えればいいのか... | イメージがつかないことでの事前準備の遅れ | |
| B | 子どもの反応とか全然わからないし。 | | |
| B | 本格的に取り組んだのは1週間前?3日前?2日前? | | |
| C | けっこう集まってすぐばって決めた感じで、すぐできた。 | | |
| C | 議論とかそんななかったね | 最小限の準備 | やりくりしながらの事前準備 |
| C | (グリッターバグは授業で)一回やったやつだったから、やりやすかった。 | | |
| A | 先生が教材とか資料とか...去年はこんなの使ったよって教えてくれたりして。 | | |
| D | 負担が大きくなるだろうなって思ったけど、絵とか書いてたらちょっとだけ楽しくなったりして(笑) | | |
| D | 上手に企画はできたかな。 | 事前準備の楽しさ | |
| D | シナリオを考えるのも楽しかったし、(ペープサートを)作ってる間も楽しかった。 | | |
| A | みんなバイトやったりするのでこのグループ。時間合う人だけで来て、うまく進めたよね。 | 事前準備をとおしてのメンバーシップの確かめ | |
| C | みんなバイトを言い訳にさぼったりしなかったからね。 | | |
| A | 楽しくすることを心がけないと子どもの集中力っていうのは切れるなっていうのは実習ですごく感じた。 | | |
| A | テンションを合わせるというか、そんな感じ。 | | |
| A | 3歳はほぼ聞いてない、4歳はほぼ聞いてる、5歳は聞いてる、みたいな感じ(笑) | 子どもの認知発達段階の査定 | クラスの子どもに合わせた健康教育の仕上げ |
| A | おもしろくというか、本気でやるっていうか...あんまり堅苦しく、なんか難しくもしすぎず... | | |
| A | カンファレンスでくじら組(健康教育の対象クラス)の様子とか(クラスを担当した学生から)聞いてたから。 | | |
| D | リハーサルみたいな感じで保育士の先生に1回見せて...自分たちの顔を隠してこれ(ペープサートのウサギ)だけ出した方が集中するよって言われて... | 保育士からスキルを学ぶ | |
| 健康教育当日 | | | |
| B | 緊張はするよね。嫌だっていうか、ちゃんとできるかみたいな。子どもの反応とかも全然わからないし。 | | |
| C | 緊張した。 | 子どもの反応への不安 | 不安と責任感の中での健康教育の開始 |
| D | (子どもの反応が)手探りだよな。 | | |
| D | 返事が返ってくるか? | | |
| D | 正直不安だった。初めてやるからうまくできるか... | | |
| B | ほんとに子どもに伝えきれののかな。 | 健康教育の提供者としての責任 | |
| B | 重圧...なんか責任みたいなもの | | |
| C | (作ったお話し)けっこう子どもたちに人気だったよね(笑)。笑ってたもんねこどもたちね。 | | |
| D | 自分たち反応が見れなかったんです。こうやって(机の後ろに)隠れてやるんだって。だけど声を聞いたらすごい大きな声で「はいー」と言ってくれたし、それでも自分たちもこれちゃんとやらなきゃなっていうやる気にもなったから、とっても良かった。 | 子どもの反応の良さから得た後押し | |
| B | 子どもたちの反応は良くて自分たちの出した質問に対してもすぐに答えてくれたりして... | | 子どもの反応に合わせたその場での軌道修正 |
| C | (子どもたちから)「はやかっつ〜」って聞こえたから、「あっそうか、ごめんね。じゃ次はゆくりやろうね」って言って... | | 子どもの反応に合わせた工夫 |
| C | 1回目は(子どもたちは)なんか見てるだけって感じで...2回目は一緒に手(洗いの動作を)やりながらちゃんとやってたから。 | | |
| C | 次はどのポーズかって分かるように、ちょっと振りの前で「次はこれだよ」ってすぐポーズしたりして。 | | |
| A | 計画ちゃんと立ててたんですけど、途中何だったんだろう。何か変わったよね。最後にアカペラで歌うことになって。 | | |
| A | 一人覚えてる子(学生)がいたので、やってみれば意外とできた! | | |
| A | そのときにこの5人(学生たち)が慌てたっていうか...。先生が言ってた、子どもたちはそういうすきを見てまともなく...こっち側のなんていうの?あせり? | 子どもの集中力が途切れないよう平静を装う | 子どもを集中させる工夫 |
| A | 「あっどうしよう!」っていう子どもも見てる。一瞬でもそれをもうちょっと減らしたら良かったかな。 | | |
| A | みんな覚えてたと思うよ。みんな見てるって意識があったから。子どもたち本当よく見てる、3日間実習して。だからすぐ切り替えて難を逃れることができてたような。 | | |
| B | 健康教育をする側と子どもたちが初めての、初対面だったので。とりあえずやる前に和ませようと思って遊びを入れたりして、ちょっと仲良くなったんです...たぶん子どもたちは遊びたい気持ちが強かったのかな。 | 意図したところに注目させることの難しさ | |
| B | (子どもたちが)集中力に欠けた所もありましたし、自分たちが学ばせたいところに目が向かず違うところに目がいつてしまったり。 | | |
| 健康教育後 | | | |
| C | 次の日に「できるよ」「覚えてるよ」ってしてくれたのはすごいうれしかった。 | | |
| C | 教えたけどほとんどできてないから...聴いていきなり出来るもんじゃないですね。 | | |
| A | 次の日も覚えててくれて、手を洗ったら「おいて」とか言ってくれて。教えてよかったな、と。 | 子どもの言動から評価した教育の効果 | 子どもと保育士から得られた健康教育の効果 |
| D | 「こんだったよね。ちゃんと持ち方あってるよね。」とか言ったりして...掃除する私のとこに駆け寄ってきて「つつるになっつ」って言って見せてくれた子もいて。その時はやってよかったって思いましたね。 | | |
| D | 中にはやっぱ、すぐパツと終わっちゃう子もいるんですけど(笑) | | |
| A | 保育士さんがこれを続けさせたいってことで、それがずっと持続されるのであれば成功したのかなとは思います。 | 保育士との連携による健康教育の波及効果 | |
| A | 下の組にくじら組が教えるみたいなことをやってたんです。教えたいなっていうことも言ってた。 | | |

実施直前の緊張感や重圧はいったん健康教育が始まると、子どもたちの相槌や笑い声によってかき消された。学生たちは笑顔で生き生きと健康教育中に子どもたちと学生の間で起こった出来事を語った。「人気だった」自作の紙芝居やペープサートに子どもたちが聞き入る様子を見て、学生は「自分たちもこれちゃんとやらなきゃっていうやる気になった」と〈子どもの反応の良さから得た後押し〉を感じた。また、手洗い歌に合わせた手遊びでは「はやかった〜」という子どもたちの声に「あ、そっか、ごめんね。じゃ次はゆっくりやろうね」と応え、「次はどのポーズかわかるように振りの前で『次はこれだよ』って」と子どもの動作を導いたり、CDに合わせて歌うことから急きょアカペラに変更をしていた。学生は〈子どもの反応に合わせたその場での軌道修正〉をするなど【子どもの反応に合わせる工夫】をした。

また【子どもを集中させる工夫】として、学生は『あ、どうしよう』っていうの、子どもも見てる」「子どもたちはそういうすきを見てまともにならず…」と言い、〈子どもの集中力が途切れないよう平静を装う〉ことについて語った。一方、健康教育の対象クラスと学生が初対面だったグループでは、お互いの緊張をほぐすために体を使った遊びで導入をしたが、「ちょっと仲良くなり始めたところに健康教育を挟んだので…自分たちが学ばせたいところに目が向かず違うところに…」と〈意図したところに注目させることの難しさ〉を語った。

(3) 健康教育後

健康教育後から実習最終日の間に学生たちは「歌をまねしながら(手を)洗ってる」「駆け寄って『(歯が)つるつるになった』って見せに来て」など〈子どもの言動から評価した教育の効果〉について毎日のカンファレンスで共有しており、「教えて良かった」「うれしかった」と満足感を得ていた。またあるグループでは「保育士さんがこれを続けさせたいということで…持続されるのであれば成功したのかな」「(年齢が)下の組に(健康教育を受けた)くじら組が教えたいなっていうことも言っていた」と〈保育士との連携による健康教育の波及効果〉について語った。【子どもと保育士から得られた健康教育後の効果】は3つのグループで語ら

れた。

2) 学生の気づいた自身の課題とその後の変化

学生たちの自由な語りの中から、子どもへの健康教育の経験から気づいた学生自身の課題とその後の変化について抽出できた。以下に学生の語りを引用しながら示す。

「手洗いをした後、おなかで拭いている子もいて…」など手の洗い方を強調するあまり、その目的を十分伝えきれなかったことや子どもの誘導の混乱、物品不足、事前のシミュレーション不足など運営上の課題、保育士との調整不足が反省点として挙げた。一方で子どもの「惹きつけ方」や「具体的な言葉で話す」など効果的な子どもとの関わりは健康教育をとおして学べており、「次の日から(子どもとの)関わり方とかしゃべり方もちょっと意識」して実習に臨むようになっていた。また「教えることで再確認できるいい機会」とし、既習の知識を現場に還元することで知識の再確認をしていた。

ある学生は元気でよくしゃべる男の子との手洗い後のやりとりを次の様にふりかえった。「(ライトで照らしたときに)『あ、汚い。汚れてる』って言ったんすよ。そしたら最初は友だちに『おれ光ってた』みたいな感じで自慢してたんですけど、次の日、自分のとこへ来て『石鹸のにおいする?』『汚れ落ちてる?』って言いに来た…もしかしたら傷つけたかな、気にしてたのかなって。」学生はこの男の子との関わりを通して子どもへの倫理的な接し方を考えるようになっていた。

一部の学生は「(大人を)お手本としている」という気づきから「(自分も)つつい手洗いしないでご飯を食べる時もある、普段。しないと絶対だめだな。」と語り、「体調崩して実習休むのは嫌だから」と学生自身の生活習慣の見直しもするようになっていた。

3) 教員からの教育的支援に関する学生の要望

今後の小児保健看護の教育へ示唆を得るために教員からの教育的支援に関する学生の要望をたずねたところ、学生への告知時期を早めること、子どもへの健康教育のイメージがわかるような視聴覚資料や教材の提供、などの意見があった(表3)。子どもを対象にした健康教育を2年次の学習段階で行ったことについて学生た

表3 教員からの教育的支援に関する学生の要望

| |
|------------------------------------|
| 健康教育の準備について |
| ・健康教育について実習前の授業で取り入れるとよい |
| ・健康教育のイメージがわかるようビデオを見せるなど |
| ・保育の教材や本などがあるとひと工夫できた |
| ・実習オリエンテーションで知らせてほしい |
| 健康教育の実際について |
| ・日常生活に取り入れられるテーマがよい |
| ・健康に関するテーマがよい |
| ・実習期間最終日だと気が重いので、半ばでよかった |
| ・実習で関わりのあるクラスだと緊張しないしなじみやすい |
| ・クラスになじみのある学生が導入をしたのでうまくいった |
| ・実習(評価)と関係ないから楽しもうと思ったら楽になった |
| その他 |
| ・保育士さんから子どもの肥満対策もしてほしいと言われた |
| ・保育士さんの体温計の入れる位置が違っていたので保育士さんにも教える |

ちは「教えるっていう体験」「援助の仕方を学べる」と語り、「経験した方がいい」と実習 I での健康教育のとりくみに概ね肯定的であった。また健康教育は「子どもたちが健康に過ごすために重要なこと」「看護師とか専門的に関わっている人にしかできないこと」であると述べ、テーマは「日常生活に取り入れられるもの」「健康に関するもの」が適当と語った。これらは既習の看護学の知識から提供できるため学生にとって取り組みやすいことが分かった。実施時期は学生とクラスの子どもたちとになじみができ、子どもの認知発達がアセスメントできる実習中盤が良く、学生の心理的な負担も少なかった。

IV 考察

1. 実習施設のニーズを実習にとりこむことの影響

保育所において子どもたちに消化機能に関する健康教育を行った松谷ら(2007)の報告によると、保育士のニーズの高かったテーマは消化機能に次いで、感染予防対策、歯の健康であり、今回実習施設が希望したテーマと一致していた。現在、食育については保育士や栄養士が中心となって取り組まれ普及していることが報告の多さからも伺える(松尾ら, 2010; 石橋, 2008)。しかし、看護専門職の保育所への配置状況は上別府(2009)らによると平成 21 年時点で 29.3%と、増加傾向ではあるものの施設の設置主体の公私や自治体によ

る差が大きく、本学が実習 I で利用している施設においては看護職の配置がほとんどない。本来なら保育所に勤務する看護師が増え、子どもたちの身近にあつて継続的で子どもの生活へ取り込まれやすい健康教育が展開されるとよい。しかし現状では施設外の看護専門職が地域や施設のニーズに応じ、健康教育を担うのが実際的と思われる。保育所にとって毎年実習に来る学生は人的資源の一つであり、学生にとって今回の子どもたちへの健康教育の経験は結果で示したように貴重な学習の機会となっていた。今回のとりくみは実習施設と学生の双方にとってメリットがあつたと考える。

2. 科目を超えた学生の学習の積み重ねを見通すこと

小児保健看護では 2 年次で健康な子どもの成長発達と日常生活援助に焦点を当てた保育所での実習、3 年次では病気をもつ子どもへの看護に焦点を当てた小児病棟での実習と段階を追って学習する。3 年次実習で学生は子どもと家族の個性に合わせて疾患、治療、成長発達、生活を含めた保健指導の機会をもつため、2 年次の段階で健康教育を経験することは重要と考える。しかし、全ての学生が保育所での実習中に健康教育を実施するには実習期間、教員の人手、教育媒体などが不足しているのが現状である。

新カリキュラムが平成 23 年度から順次導入され、2 年次後期の実習終了後に「ストレスマネジメントと健康教育」と「看護大学ゼミナール II」の科目が展開されている。学生たちは臨地実習で得た経験を基に、理論に照らして再検討したり、地域で生活する人々がもつ健康問題や課題の解決に具体的にとりくむ機会を得ている。小児保健看護の科目内の縦のつながりに加え、並行する科目を通じて学生が学習を積み重ねていることを教員が見通し、学生がより学びやすい組み立てや学習内容のつながりを意図的にもたせることが重要であると考える。

V 結論

1. 本学 2 年次生が保育所において健康教育を実施することは、事前準備の負担はあるものの、子ども理解や看護専門職としての意識が深まる経験であった。
2. 学生が健康教育を実施する際は、事前の健康教育

に関する学習の機会、イメージがわくような視聴覚資料や教材の提供、科目を超えて学生の学びにつながりをもたせるなどの工夫が必要である。

謝辞

本実習での新しい試みに取り組むきっかけをくださった、保育施設の職員の皆さまと子どもたち、本試みに意欲的に参加し、貴重な意見を聞かせてくれた学生たちに心から感謝申し上げます。本研究は第59回小児保健協会学術集会（2012）にて口頭発表しました。

文献

安梅勅江(2007)：ヒューマンサービスにおけるグループインタビュー法 科学的根拠に基づく質的研究法の展開,医歯薬出版, 32-63.

石橋恵美里 (2008)：野菜の栽培、食生活を通しての児童の食事への意欲・関心を高める取り組み,保育と保健, 14(1): 57-64

出雲慶子,大木伸子,小泉麗他 (2007)：慢性疾患を持つ幼児の集団生活における支援,小児保健研究, 66(2), 346-351.

株式会社ニチオン,グリッターバグ製品情報,

<http://nition.jp/glitterbug.html> (2013年10月24日現在)

上別府圭子,多屋馨子,門倉文子他 (2009)：保育所の環境整備に関する調査研究報告書ー保育所の人的環境としての看護師等の配置-日本保育協会, 14-16

松尾裕子,桐山千世子,内山瑞枝他 (2010)：保育園における0歳児からの食生活への取り組み, 保育と保健 16(2), 74-77

松谷美和子,菱沼典子,佐井由美他(2007)：5歳向けの「自分の体を知ろう」健康教育プログラム:消化器系の評価,聖路加看護大学紀要, 33, 48-54.

沖縄県立看護大学 (2013)：シラバス 2013,平成 25 年度入学生用, 60,77

大久保暢子,松谷美和子,田代順子他 (2008)：幼稚園・保育園年長児向けのプログラム“自分の体を知ろう”に対する評価指標の検討, 聖路加看護大学紀要, 34, 36-45.

佐藤公子,半田美樹,古津麻純.(2011)：保育園における幼

児の効果的な手洗い指導の検討,小児看護, 34(3), 392-396

白水美保,山下早苗,武井修治 (2008)：保育所実習前後の看護学生の子どもイメージの変化,鹿児島大学医学部保健学科紀要,18,15-21.

多田敦子,川口千鶴,朝野春美他 (2006)：幼稚園・保育所における子どもたちの健康問題と障害を持つ子どもの受け入れの現状,自治医科大学紀要, 4, 55-62.

矢田昭子,笠柄みどり,吉田由美(2007)：保育所実習が看護学生の子ども観に及ぼす影響,島根大学医学部紀要, 30, 35-42

Practical report

Trial of Health Education for Preschoolers in a Day-Care Center by Undergraduate Nursing Students

Kazuyo Uehara¹⁾ Minako Suzuki²⁾ Fusae Nakama³⁾ Hiromi Kuniyoshi⁴⁾

【Introduction】

Health education for preschoolers by nursing students was begun in 2011 according to a request for health education from the day-care center practical training facility at our college.

【Purpose】

To record the kind of influence that health education for preschool children had on the students, and to develop prescriptive implications regarding the education contents and methods of health education for children.

【Methods】

Descriptive research using self-written questionnaires and group interviews.

【Subjects】

Students who conducted health education for children in Child Health Nursing Practicum I

【Results】

From the questionnaire, out of 20 students, there was one student who already experience in health education. All participants answered that they had fun providing health education, but half felt it was a burden. The experiences of students were, from the start of practice to the day before health education, "making time to do preparation", and "designing health education to suit the class". On the day of health education, the students started with "a feeling of uneasiness and responsibility", and during the education, they did "matching the children's reactions" and "letting the children pay attention". After the education, they felt educational effectiveness from the behavior of the children and staffs in the center. Students were willing to provide the health education. They studied the effective communication skill for children through health education, and they also revised their own lifestyle.

【Conclusions】

Although health education for second graders is a burden, there was a deepening of children's understanding and the awareness of nursing specialists. In future, in addition to supporting health education, faculty should consider going on to further studies beyond the actual subject.

Keywords: health education, day-care center, preschool-aged child, nursing university student

1) Child Health Nursing, Faculty of Nursing, Okinawa Prefectural College of Nursing

2) Formerly with Child Health Nursing, Faculty of Nursing, Okinawa Prefectural College of Nursing

3) Part-time Academic Assistant, Faculty of Nursing, Okinawa Prefectural College of Nursing

4) Former Part-time Academic Assistant, Faculty of Nursing, Okinawa Prefectural College of Nursing